

## 羊飼いたちに臨まれた福音(ルカ 2:8-20)

いま私たちは偶像とヒューマニズム、また災難で滅びに向かっている国に住んでいます。そして、そこに光を照らすべきクリスチャンの人口は0.3%しかない、そういう国です。しかも減少しつつある国に住んで、そこにその国を生かすために召された者としていま礼拝を捧げています。なので自分の存在の意義を改めていただきたいなと思います。そして、その上、うわべなどつまずくことがないようにしていきたいなとそう願います。皆さんがそういうふうにいるかどうかと関係なく、神様はこの国を生かすために皆さんひとりひとりを召されたことに間違いありません。ぜひ、その自覚を持つようになることを祈りたいと思うし、その歩みにうわべによってつまずいたりすることがあってはいけないのではないでしょうか。今日の聖書の箇所を通してそのことに対する明確な答えをいただいて、それを握ってこの国を生かすレムナントとして切り株として残りの生涯をともに歩んでいきたいと思います。

今日の聖書の箇所は、イエス様がこの世にキリストとしてお生まれになる場面のことが記されています。その良い知らせ、喜びの知らせが一番最初にどこに届いたのかということが詳細に記録されています。夜、羊の番をしていた羊飼いたちに一番最初天使によって福音のお知らせが、イエス様がキリストとしてこの世に来られた、あなたがたの町に救い主が生まれた、というお知らせが届いたのです。夜、羊の番をしていた羊飼いたちに。

### 1. 福音はうわべと関係なく臨まれる。

それを通して、まず第一に、福音は人間のうわべなどと関係なく臨まれるものだという事を心に覚えましょう。

#### 1) うわべによる評価に翻弄されるこの世

世の中はうわべによって人を評価していて、それに翻弄されているところなのです。人のうわべ、さまざまな内容があるでしょう。容姿を始め、才能や出身、肌色、さまざまな人間のうわべというものがあります。家庭環境やバックグラウンド等々のうわべにあたる内容でしょう。そういったうわべによって優劣を決めるところがこの世というところなのです。そして、その評価によって自慢する場合もあるし、逆にうらやましいと思う人もいたりするところがこの世です。うわべの評価によって自信を持つ場合もあるし、逆に落胆してしまう場合もあります。そのうわべの評価によって上に立っているものがうっかりハラスメントに走る場合もあるし、それが腹立つので鬱憤を晴らしてさまざまなデモンストレーションに出る人間もいます。また、うわべの評価によって上に立った場合には、同情の思いで人を見る場合があるし、逆にそう見られる人はそれが心の傷になって傷を抱えて生きる場合もあります。このよううわべによって翻弄されているところがこの世というところなのです。私たちもその世の中を一緒に生きるものです。しかし、クリスチャンの私たちは福音に目を留めて、福音を基準にしてすべてを見直さないといけません。

#### 2) みじめな立場の人たちに届いた最初の福音

今日の聖書に記されているように。神様の福音、イエス・キリストの福音はみじめな立場の人たちに一番最初に届いたということ覚えましょう。それで赤ちゃんとしてこの世に生まれたイエス・キリストに礼拝を捧げた最初の人たちがだれかと言いますと羊飼いでした。当時、羊飼いというのはあまり良い仕事ではありません。もちろん自分の羊を飼うため、守るために仕事をするという人もいましたが、大体は羊を持っているオーナーが人を雇って羊の番をしてもらうというのが習慣でした。しかも夜の羊の番というのは余計ひどい仕事ではないでしょうか。そのように夜の羊の番をしていた羊飼いたちに天使が現れて一番最初の福音が届いて、彼らがイエス様に一番最初に礼拝を捧げることができた。これには先ほど申し上げましたそのようなメッセージが込められているわけです。私たちに絶対的ないのちの福音、絶対価値のないものにも替えられないイエス・キリストの福音は人のうわべなどと全く関係なく臨まれるものなのです。そして、その後、赤ちゃんのイエス様に礼拝を捧げた者は、今まで神殿で礼拝を捧げ律法を守り、立派な人間と褒められていたパリサイ人ではなく、東にいた博士たちが、大きな星を見てイエス様を探し訪

ねてきて礼拝を捧げることになります。東の博士たちというのは、ユダヤ人から見たときには異邦人なのです。異邦人に福音が届いて、彼らがたぶん時間的に考えたときに、羊飼いの次に東の博士たちがこの世に生まれたキリスト、イエス様に礼拝を捧げることになりました。なぜ神様はこのようにされたのでしょうか。改めて人間がみな勘違いして、この世が翻弄されていますが、イエス・キリストの福音はそれに当てはまるものではありません。人間のうわべなどまったく関係なく臨まれる神様の一方的な恵みであり、福音の祝福なのですということを私たちに知らせるためなのです。

### 3) キリストの他に希望のない同一根本(ローマ 3:23、ヨハネ 8:44、エペソ 2:3)

なぜかと言いますと、人間のうわべがどのように違っていても、いくら異なっていたとしても、世の中で評価されるほどいろいろな差があるにもかかわらず、人間はみなキリストのほかに希望がない根本を持っていることは一緒なのです。だから神様はわざわざ人間の基準から見たときには、みじめな人間、みじめな立場の方に福音が先に与えられるようにされました。その神様のみこころ、神様のメッセージをしっかりと受け止めて心に留めましょう。キリストのほかに全く希望のない人間の根本の部分はみなが同一、一緒なのです。すべての人は罪を犯して、神の栄光を受けることができないことはみな同じなのです。才能ある人間もない人間も、上の立場の人間も人が指差すようなみじめな立場の人間でもみな一緒なのです。神様を離れてたましいが死んだままの状態であることには根本的に一緒なのです。だから、みなが外見でうわべで自慢したり落胆したりしていますが、みながあなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出たものであることには一緒なのです。同じなのです。当然、生まれながら神の御怒りを受けるべき子らとして生まれることはみな一緒なのです。神の御怒りが留まっていることには変わりはありません。金持ちでも貧乏な人間でも、刑務所の中に居る人でも外に居る人間でも変わりはありません。これが人間の根本なのです。なのに、世の中ではなぜうわべで評価するのでしょうか。このことがわかっていないからです。うっかりすると教会に通っていても、このことがわかっていないと同じ扱いになってしまいます。同じく翻弄されてしまいます。だから人はみなそのたましいが死んだ状態であり、たましいが死んだということは神様が離れて悪魔サタンがたましいの主人になっているという意味なのです。なので、そのたましいの状態はいつも神様と反対の方向に行くしかありません。神でないものを神だと拝むようになり、幸せでないものを幸せだと探し求めることになり、成功でもないものを成功だと追い求めていくようにならざるを得ません。なので、結果的にはいくら頑張っても根本が変わらないので、すべて疲れて重荷を負っている人といわれるように、精神的に疲れて、うつやパニック障害などさまざまな症状が現れ、体も壊れていろいろな病気を患うことになり、人間関係も壊れて家庭も崩壊して人生のさまざまな部分が壊れていくことになり、一度は死んで死後にはさばきを受けることになり、絶対ここから逃げられない運命に束縛されている状態なのです。そして、これが子孫たちに遺産として受け継がれることになります。だれひとりとして自分の力でこの滅びの運命から抜け出すことはできません。うわべがどうであれ人間はみな滅びの運命に閉じ込められているままの状態なのです。多くの人がこのことがわかっていないので、偶像拝んでどうにかしようと、宗教求めてどうにかしようと、哲学を通してどうにかなるだろうかともがきをしているけれども、やればやるほど泥沼にはまっているかのようにどんどんどんどん溺れていくだけなのです。これが人間です。人は勘違いしてるだけなのです。解決の道がありません。解決不可能なのです。なので、神様はこの問題の解決のためにキリストを約束されました。キリストのほかに希望などありません。わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければだれひとり父のもとに来ることはありません。一番最初から蛇の頭を踏み砕いて、あなたがたを救われるよ。女の子孫が生まれて、キリストのほかに人間に希望などありません。そのことに対しては、うわべがどうであれみな一緒なのです。

### 4) うわべの惨めさは根本を見る窓

なので、人間のうわべのみじめさというものは、むしろ今まで見たことのない、今まで気づいてなかった自分の人間の根本を見るための窓のようなものなのです。みじめさそのものに振り回される理由などありません。世の中ではそのように評価しているのですが。

### 5) 落胆せずむしろ感謝すべき人間のみじめさ(I コリント 1:26-27)

なので、人間のみじめさというものは自慢するものではありませんが、それによって落胆することなどしないで、むしろ感謝すべきものなのです。それを通して人間の根本、本当の自分を見ることができたということなので。そういう意味で神様はこの福音を羊飼いたちに、しかも夜、羊の番をしていた羊飼い、そして東の博士たちに一番最初に福音のお知らせを伝えることになったわけです。私たちのすべての勘違いを全部壊して砕いていくという意味がそこにはあります。ということで、パウロもコリントの手紙でこのように語っています。「兄弟たち、自分たちの召しのことを考えてみなさい。人間的に見れば知者は多くはなく、力ある者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません」。身分が低いから福音を受け入れるという意味ではありません。身分が低いか高いかによって評価してる世の中の基準に福音を当てはまるものではありません。みな福音が必要なのです。でも世の中の評価の基準に囚われている人は、人より上というわべが優れている場合には、自分自身には救い、福音などはいらないものだど勘違いするわけです。そういう意味で先ほども申し上げましたように、私たちが人間的に評価されるところがあまりなく、みじめな立場に置かれていて、またみじめなさまざまな経験をしたということは、落胆する、またうつになるような材料ではなくて、感謝すべき材料なのです。みな自分は気づいていないでしょうけれども、それを認めたくないからみじめさのゆえに落胆するということは、裏返しますと高慢なのです。なぜみじめさに留まっているのでしょうか。その裏にあるどうにもならないキリストのほかには希望のない人間の根本を見なさいということで神様が許されたものなのに、そちらは行こうとしないのです。ただただ落胆して涙を流して鬱憤を晴らして誰かのせいにして、それで人生終わりにしようとしているのです。悪魔の策略なのです。キリストの福音は人のうわべと関係なく臨まれる神様の恵みなのです。そのことをぜひ覚えましょう。

## 2. 福音は人を最高の身分に変えられる。

そしてイエス・キリストの福音はそのようなみじめな人間に臨まれることで、福音を受けた人を最高の身分に変えられる力なのです。うわべによって評価する世の中では、あの人はこうだあだといろいろ言うかもしれません。また、皆さんもそのように言われたり、自分で勝手に思ったりして、自分自身のことをそのように形成してきたのではないのでしょうか。セルフイメージというものを。そこを今日のメッセージを通して、福音の前で全部壊して再創造していかないとはいけません。福音は指さされるしかない、世の中の基準から見たときには評価に値することのない人間に留まっている人を最高の祝福の身分に変えられる力なのです。

### 1) ガラテヤ 2:20、3:27-29

福音はどういうものなのかと言いますと、ガラテヤ 2:20 には「わたしはキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きているのです」。福音が届いたその人はこのように変えられます。自分はこれだあれだと思っていたその自分は十字架とともに死んで、キリストが内側に生きる新しいものに作り変えられて再創造の働きがなされることとなります。それがイエス・キリストの福音なのです。それでその同じガラテヤ 3:27-29 にはこう書いてあります。「キリストにつくバプテスマを受けたあなたがたはみな、キリストを着たのですキリストにつくバプテスマを受けたあなたがたはみな、キリストを着たのです。ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由人もなく、男と女もありません。あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって一つだからです。あなたがたがキリストのものであれば、アブラハムの子孫であり、約束による相続人なのです」。イエス・キリストの福音は、みじめだと思われていた人間に臨まれまして、その人をこのようにアブラハムの子孫に、約束による相続者として変えられる力なのです。その人が何かをやったわけではありません。その人が修行や何かを磨いて自分を変えたからではありません。私たちのなにかと全く関係なく、神の一方的な恵みによってうわべ、差別などなく臨まれまして。福音が臨まれた人はこのように変えられます。キリストを身にまとったんだよ。この身にまとったということは、当時の表現では、その人のステータスなのです。身分を表すためにどういう服を着るのかということで説明していたわけです。キリストを身にまとったというのは、キリストと似たもの、同じようなレベルという意味がそこにはあるわけです。ただ私は何もしてないのに、根本的に滅びるしかない者なのに、なぜかわかりませんが、私の方にキリスト・イエスの福音が臨まれました。私に何かあるからではありません。これが福音なのです。訳がわからないけれども、臨まれます。

したらその福音によって自分が新しく作り変えられるようになるわけです。これがイエス・キリストの福音です。

2) I コリント 3:16、ローマ 8:29-30、8:39、エペソ 1:3

その人がキリストを身にまとして、キリストがその人のうちに住むようになったということは、I コリント 3:16「あなたがたは、自分が神の宮であり、神の御霊が自分のうちに住んでおられることを知らないのですか」。本当に信じていただきましょう。いくらみじめな人間でも、いくら夜の仕事をしている人間でも、イエス・キリストの福音が届いたら、その人のうわべと関係なくその人は神の神殿に変わります。神の神殿に変わるというのはどういう意味なのかもう少し聖書を確認していきましょか。ローマ 8:29-30「神は、あらかじめ知っている人たちを、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたのです」。イエス・キリストの福音が届いたら、今までは世の中ではみじめと指さされるような立場の人間が、キリストと同じ形、同じ姿になったと言われるのです。もう一度言います。何かを仕掛けたわけではありません。ただ恵みによって臨まれたのにそのように変えられるわけです。これがイエス・キリストの福音なのです。「それは、多くの兄弟たちの中で御子が長子となるためです」。イエス・キリストが長男で、私たちは次男坊にあたるものなんだと。「神は、あらかじめ定めた人たちをさらに召し、召した人たちをさらに義と認め、義と認めた人たちにはさらに栄光をお与えになりました」。イエス・キリストの福音が届いただけなのに、義と認められると同時に、栄光が与えられたと言われているのです。これから与えられるのではなくて過去形なのです。同時なのです。問題は私たちがそれを知らないで気づかないで信じていないだけの問題です。イエス・キリストの福音は皆さんが気づかなくてもそのように私たちを作り変える力なのです。そのことを今日の聖書を通して改めて確認しましょう。最高の身分に変えられて、最高の権威が与えられることとなります。だれにでしょうか。世の中で指さされるみじめな人間と言われるしかなかった私たちがそのように変えられるようになります。勘違いしないように。クリスチャンの中でも福音が何かということがよくわかっていないので、自分自身のこともずっと勘違いのままなのです。うわべによってずっと振り回されるのです。いつも劣等感と優越感にいつも翻弄されて、上か下か、できるできないに振り回されっぱなしの人生をもう終わりにしましょう。福音はそういうものではありません。皆さんのどうのこうのは一切関係ありません。不思議なことに、夜、羊の番をしている羊飼いたちに、東の博士たちに最初の福音が臨まれました。だれが理解できるのでしょうか。ユダヤ人から見ると到底納得できません。だから信じられないのです。彼らは未だに。福音はそういうものではありません。皆さんがこの福音によって自分自身を見直していかない限りは、ほかの人を見るときにこの福音が必要なたましいとして見るができるのでしょうか。そうするとまた喧嘩して競争して戦うしかありません。それが負けなのです。私たちは征服者として召された者なのです。福音はみじめな人を最高の身分に変えられて最高の権威を授けるようになりますので、だから、このように再創造されるので、このように言われるわけです。あなたがたは世の光ですと。でもレムナントを見たときに、自分の家庭環境や自分の肉体的ないろいろな条件、自分の才能や頭の良さ悪さ等々によって、私は世の光なんだという意識を持っているレムナントをほとんど見たことがありません。うわべによって翻弄されているから。福音はうわべに関係ありません。大人も大体みな同じでしょうけれども。なぜそれがわかるかと言いますと、皆さんがいらっしゃる現場で、私が光としてここに来ていて、ここは暗闇で暗闇は光に必ず負けるようになっているんだと思って期待して、それが祈りになる、そういう信者をあまり見たことがないのです。信じればいいのです。信じれば。皆さんの今までの過去、それに縛られることがないように。それがもし皆さんの内でウズウズしているならば御座のやぐらが立つように祈り、それが砕かれることを祈ってあげばいいのです。味わえばいいのです。私はそういう存在ではないんだと。いろいろなことが私を振り回しているけれども、私はそれと関わりのないものなんだ、もう縁が切れた。御座の祝福を覚えて、そちらにフォーカスを合わせて、それが私に豊かに豊かになるように。そうなることでウズウズしていたものが壊れて去っていくようになるわけです。皆さんを世の光として歩けないように邪魔するものがあるわけです。それが砕かれないといけません。私たちはそういうふうに変えられました。なぜそう言えるのでしょうか。イエス・キリストの福音がそういうものなのです。皆さんが思っているようなものではありません。

3) マタイ 5:17、1 ペテロ 2:9、エペソ 1:23

だから福音はその福音が届いた人をどのように変えられるかと言いますと、「しかし、あなたがたは選ば

れた種族、王である祭司、聖なる国民、神のものとされた民です」と大胆に言えるように変えられます。「それは、あなたがたを闇の中から、ご自分の驚くべき光の中に召してくださった方の榮譽を、あなたがたが告げ知らせるためです」と。暗闇の力が砕かれ、いのちの運動が行われてたましいが生かされることで、そこに関わっていた暗闇の文化でさえ変えられるような身分、権威が与えられて、そのように変えられています。いつでしょうか。イエス・キリストの福音が届いたときに。だれにでしょうか。うわべと関係なく、イエスはキリストと信じる者であればその人に福音が届いたわけです。それで刑務所にいながらも大胆に宣言しているのです。私は天にある霊的すべての祝福をいただいている幸いな者なんだと。そのように変えられます。皆さんが行くところで必ず暗闇が砕かれて、いのちが生かされる神の働きが神の国のことが必ずなされるようになってることを信じましょう。なぜ信じられるのでしょうか。イエス・キリストの福音はそういうものなのです。

#### 4) マタイ 6:33、使徒 1:8

なので、自分がこの世で尊い存在だということがわかるので、イエス・キリストの福音が届いた人は、今までのように何を食べるか、何を飲むか、何を着るかなどと世の中がテーマにしているものをテーマにしません。神の国とその義を第一に求める、それを人生のテーマにする者に変えられます。次元が違うのです。だから争わない、だから譲るのです。だから負けるのです。本当の負けではありません。テーマが違うから。ご飯がテーマであれば、ご飯のために一緒に戦わないといけませんが、向こうはご飯がテーマなのに、こちらはたましいがテーマなので喧嘩になりません。ゲームにならないのです。それが聖書で勧められている、譲りなさい、我慢しなさい、愛しなさいといろいろ言われてる内容のわけなのです。道徳の教訓ではありません。私はもう違うんだと。レムナントの時から、仲良くみなとやりながらも私は違うんだという意識をずーっと持っていないといけません。大人の方々ももちろん同じなのです。でも、なぜ違うなどと思わないかという、過去の亡霊に未だに翻弄されているからです。世の中の評価の基準に未だに振り回されているのです。それが全部壊れていくように。今日のメッセージを通して。皆さんは不思議ではないでしょうか。世界最高のニュースが大統領や博士に届くというのが普通でしょう。夜、羊の番をしてパートタイム、バイトの中でも一番ひどいバイトをしている、そういう扱いをされている人に。ダビデも兄弟の中で一番末っ子で、いつもダビデにその仕事が回ってくるのです。羊飼いをしなさいと。それほど羊飼いと仕事はしないといけない仕事なのですが面倒くさいので、そういう人に任されるようなものなのです。だからオーナーは大体みな雇って、バイト代を払って経営していたということが本を見ますと記されているのです。だから福音が届いた私たちはどのような身分なのかといいますと、自分の国が植民地なのかどうかのそのテーマでさえ、あなたがたは知らなくていいよ。あなたがたは地上のものがテーマではなくて、Only 聖霊が臨まれると力を得て、御座の祝福があなたがたに臨まれて、そういう資格のある者になって、それがあなたがたを通して、エルサレムから地の果てにまで御座の祝福が神の国のわざが現れるようになる。そこに用いられるために生かされている者なんだよと。それを切り株と言います。そういう存在に作り変えられるわけです。それを信じて味わっていかないとはいけません。

#### 5) 社会的身分、職業等と無関係

もう一度言います。社会的な身分、職業等々はこの祝福とは全く無関係です。全部縮めて申し上げますと、みじめだと言われていたその人に、もちろん社会的にみじめでなくて評価されている者にも福音が届いたら同じです。ただみな人間の本質、人間の力ではどうにもできない、キリストのほかには答えがない根本を見ようとしないので、福音はその根本を直して解決して人を救われるためのものなので、わざわざみじめな人間の方に先に福音が届いたりすることがあるわけです。しかし、いくらそういう人間でも福音が届いた場合には、即座にその人を最高の身分に変えられて、世の光として生きることができるものに変えられるということを絶対忘れないようにしてください。今のこういう話が自分の話だと受け止めないかぎり、礼拝はあまり意味がありません。どんな嫌なことがあるのでしょうか。嫌なことがあるというのは回して回して考えると、自分が嫌なのです。自分のことをちゃんと正しく受け入れることができないので。なぜ受け入れることができないのか。親からこうされたので、誰かにこうされたから、貧乏なので、こういうことがあったから、環境がこうなので、そういうことで自分自身を見て、それが刻印されて脳細胞に刻印されて、自分を見る目がそうなるので、その眼鏡ですべてを見ると全部がねじまがって見

えるのです。悪魔の策略なのです。そこにイエス・キリストの福音が臨まれます。それが問題ではありません。親が問題でも、環境が問題でも、だれかが私に害を与えたとしても、それも問題ではありません。病気も問題ではありません。それを通してキリストでない絶対希望のない人間の根本を見るようにしないとダメです。そうすると今まで誰かのせい何かのせいにして、自分自身をいじめていたそういう考え方、そのすべての材料が全部恥ずかしくなり、全部壊れていくわけです。秋の落ち葉のように全部落ちていくわけです。それが自由です。落ちていくだけではありません。今まで恨みになるような傷になるような、そういうことが逆に感謝になります。ほかの人は理解できないでしょう。でも、それがあったからこそキリスト Only になったんだね。それがあったからこそ自分が罪人だということを素直に認めることができたんだね。人間が自分自身を罪人と認めようとしなないことは罪中の罪なのです。キリストを拒否することなので。それが偽りの父、悪魔の一番の偽りなのです。それが砕かれて、キリストを見ることができるその入り口、材料になる犯罪、失敗、どん底、到底理解できない自分というのがあったのではないのでしょうか。良かったのではないのでしょうか。キリストだけが残り輝くように。キリストの光によってそういったすべてが全部消えてなくなるように。キリストによって私は新しくなった。しかも最高の身分なんだ。これから私が行くところで暗闇の力が砕かれて、いのちが生かされる神の国のことが現れるんだと。これを信じるからそれを祈るでしょう。これを信じない限りは祈りはいつも「神様、これをこうしてください。あれをああしてください」と神社と何も変わらないのです。それを宗教と言います。イエス様は宗教の祈りはもうごめんなんだ、やめなさいよということで主の祈りを教えました。神の国とその義を求めなさい。もちろん子どもだからここが痛いから「神様、痛いよ。治してください」という祈りもありなのですが、そのままずっとはいけません。親はすぐにちゃんと丁寧に直していかないといけません。これが痛いんだけど、痛いけどあなたは神の子どもでしょう。神の子どもが痛いだから次元が違うのです。神の国と義を求めるように。24時間いつでも私は御座の祝福、神の御霊が私に働いている。その御霊に満たされて豊かになることが許されている最高の身分なのです。うわべなどと関係ありません。教会に何年通っていても、聖書の知識をどれぐらい暗記しているのかなどは一切関係ありません。その人が牧師なのか、長老なのか関係ありません。子どもなのか大人なのか関係ありません。そのような身分に変えられました。イエス・キリストの福音はそういうものなのです。自分の弱さ、みじめさ、失敗などに縛られることなく、それをキリストでなければならぬ根本を見る材料にして感謝してよかったと宣言しましょう。

それでうわべによる自分の色を全部消しましょう。全部自分なりのセルフイメージの色が白黒、モノクロではなくてカラフルなのです。みな自分のセルフイメージがあるのです。最近、木曜日のテレビの中で鉛筆や絵の具で書いたりする番組があるのですが、まず鉛筆で外を書いて、色を塗りを入れます。私は絵が下手なので絵がうまいなあといつも見ているのですが、みなセルフイメージがあるのです。自分で気づいてないでしょうけれども。どこでわかるかという、その人の考え方、言葉遣い、行動、希望、願い等々を見るとわかるわけです。それが自分も知らないうちに自分で鉛筆で書いて、そこで終わらないで上手に絵の具で描くのです。だいたい黒っぽい。黒っぽい人は逆に沈む場合もあるし、反動的に自分が黒だということを隠すために「白、白、白」と言う場合もあります。そんなにもともと明るい子ではないのに、根が暗いから明るく振る舞うのです。いつかは疲れて倒れます。そんな色はいりません。キリストを身にまといましょう。キリストの色に染めましょう。私はキリストとともに十字架で死んだ。イエス・キリストの福音、十字架の死を無駄にはいけません。とにかくうわべによる自分の色を全部消しましょう。神様が作られた尊い自分と向き合ひましょう。唯一の答え、キリストを持つものとして向き合ひましょう。マルコのタラップンの祝福が注がれるものとして、自分と向き合ひましょう。それでいのちの運動に用いられるに決まっている自分といつも向き合うようにしましょう。そして、その祝福を味わう最高の時が礼拝なのです。皆さんが自分がこういう存在で、このような祝福がこれから用意されている、その答えをこれから見るんだと、そのために礼拝のときに約束通りに五旬節の聖霊の祝福が注がれて、みことばとともに御座の祝福が注がれる。なぜなら皆さんは現場でこの身分と権威を持って暗闇を砕いて、たましいを生かす働きに用いられることになっているので、そのために必須なのです。それが当たり前で礼拝を通して備えられ、注がれるんだというふうに信じて礼拝に望む人と、今日も行くのかという人では違うのです。礼拝は誰がここで語るか、誰が集まっているのか関係無く、この契約を握って集まる礼拝であれば、御座の祝福が注がれて、地の果てにまで私たちを証人にさせるための力が与えられるところなのです。それを信

じて礼拝を大事にして礼拝からいただきましたメッセージ、恵みを握って祈りに専念しましょう。日曜日もちろん祈るのですが、それを持ち帰って現場で祈りましょう。現場の暗闇が砕かれて、私を通して私に届いたこの福音がほかの人にも届くように、皆さんに福音が絶対必要だと本当に認めているのでしょうか。ならば、ほかの人にも福音が必要ではないでしょうか。ある牧師がアフリカの宣教地に行ったときに、そこの宣教師の人が試すつもりで、結構伝道に励んでいるという噂のある先生だったので、いきなり現地の黒人の女性に福音を伝えてみなさいと言ったみたいです。それで福音を伝えたらその人が真剣に聞いてイエス・キリストをその場で受け入れたのを見ました。それは普通にあります。見たときに、大体そこで連絡先とか次どうするかとか、そういう話をするのが今までの筋だったのですが、その先生は「いまあなたが聞いたこの福音、この福音がほかの人に必要だと思うのか」と聞いたのです。「そうです」「その福音が必要な人があなたの周りで誰がいる？」と聞いて誰々と答え、その場でその町のほとんどの人がイエス・キリストを受け入れたそうです。その人を通して。それを宣教師が見てびっくりして「ああ、なるほど違うな」と思ったそうです。ここまで行くのが恵みなのです。私に届いた福音がほかの人にも必要なんだという風に感じない限りは、感じるというよりはそういう目が開かれないと、そういうふうに見えてこないといけないのです。違いますか。皆さんの会社の社長さん、同僚、親、兄弟。この福音が必要ではないでしょうか。無理やりではないですが、まずそれにならないと契約になりません。そこで契約が成立するのです。そこで祈るとき、約束通りの聖霊が臨まれまして、暗闇が砕かれることを見るようになります。いのちの働きがどういうふうになされるか必ず見るようになります。皆さんはキリストの福音が届いて、そういうことが可能な存在に作り変えられているのです。それを今日ぜひ覚えて帰っていただきたいと思います。ちょっと広げますと、この日本の地は不可能と言われている地であり、宣教師の墓と言われている国なのです。そこで聖書的な伝道運動の基礎を据えて土台を作るミッションを私たちひとりひとりが、この教会が握って祈っていかうではありませんか。なぜなら私たちにはそれが可能な身分と権威が与えられているのです。聖書にある通りにやればいいのですが信じないから、聖書にある通りに。不信仰を全部砕いて。宣教師の墓と言われている国でもできるではなくて、だからこそできる。これが聖書的な伝道運動です。だからこそ。なぜならだからこそ何も気にしないで、気にする必要もないし、気にしてもしょうがないし、Onlyになる。去年か一昨年の宣教大会のメッセージの中で、やぐらを立てる中で教会にはOnlyのやぐらを立てなさいと言うメッセージがありました。教会がそういう意味でOnlyにならないといけません。それが聖書的な伝道運動の始まりなのです。できないような理由、条件などはいくらでもあるのです。それを全部カットしてOnly、だからこそOnlyなのです。できないところだらけなのでOnlyなのです。Only聖霊が臨まれると、これだけに絞って。そうすると日本でもできるではなくて、日本だからできるので、絶対宣教にならない国々の方に証し人として私たちが用いられるようになります。それが日本に与えられている今のミッション、祝福ではないでしょうか。世界中、宣教師が数として一番多く入っている国が日本なのです。世界中、キリスト教の人口の比率が一番低いのは日本なのです。おかしくないでしょうか。だからこそできるのです。今まで聖書通りにやってないのです。私たちはその通りにします。そのためにまずはキリスト・イエスの福音は、私たちの条件、うわべと関係なく、その福音が届いたのであれば、うわべと関係なく最高の身分にも変えられるということを信じて、自分自身のこととして感謝して、そこからスタートしましょう。

(祈り)

恵み深い父なる神様。ありがとうございます。みじめな私たちになぜかわかりませんが、不思議な神の愛と恵みによっていのちのイエス・キリストの福音が届きました。それによってうわべと関係なく、暗闇を砕いていのちを助けることができる最高の身分と権威が与えられ、作り変えられていることを覚えて、自分自身がそういう存在であることを改めて契約を握って、御座の祝福を見上げ、Onlyのやぐらがひとりひとりのうちにしっかり立つように。それで日本だからこそできるというお証し人としてひとりひとりが立つように祝福を与えてください。不信仰のすべてのやぐらがイエス・キリストの御名によって砕かれるように。イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。

